

# AJEQ News Letter

Association japonaise des études québécoises  
日本ケベック学会ニュースレター

2018年 秋号

第9巻第3号（通算26号）

2018年11月30日発行

## 2018年度 全 国 大 会 特 集

2018年度日本ケベック学会全国大会を終  
えて

廣松 勲（法政大学）

2018年10月13日（土）、愛知大学名古屋キャンパス・講義棟にて、日本ケベック学会（以下AJEQ）の全国大会が開催されました。はじめての名古屋開催となりましたが、何よりも美しく整備された大学設備と近隣環境には、非常に感銘を受けました。今回は学会創設10周年を記念して、初年度からの歴史を振り返る企画も行われたこともあり（HP上にて資料は閲覧可）、これまでの活動を総括するような大会ともなりました。例年通り、立花会長、飯笹幹事長、丹羽企画委員長、開催校所属の関理事をはじめ、各担当理事や委員の方々によって周到に準備がなされ、当日は盛況の下に大会が実施されました。

今年度はケベック州政府在日事務所代表のリュシ・トランブレーさんにもお越しい

ただき、大会冒頭に非常に熱の入った開会のご挨拶をしていただくことができました。これまでにジャズ・フェスをはじめとした文化事業に関わりつつ、ジャーナリストとしても活躍されていた新代表には、今後も引き続きご協力をお願いしたいと同時に、改めて別の機会でお話をいただきたいという思いが強くなったお話でした。

今年度の講演者として、ケベック大学シクチミ校より、ジェラルド・ブシャール名誉教授をお迎えできたことは非常に喜ばしいことでした。とりわけ、「L'état des mythes nationaux sous l'impact de la mondialisation」と題されたブシャール教授の基調講演は、先生の思想的発展・総括となるような内容であり、今後是非とも関連する著作が日本語で読める日が来ることを願うばかりです。さらに、シンポジウムにおいてもブシャール名誉教授にコメンテーターを務めていただき、伊達前副会長、杉原理事、大石理事に加えて、大中一彌教授（法政大学）にもご参

### ●本号の内容●

巻頭言（廣松勲）…1 全国大会セッション報告…3

国際地理オリンピックケベック大会報告（国際地理オリンピック日本代表チーム）…9



大会参加者の集合写真

加いただき、非常に充実した形で「ネイション」と「神話」との間にある、複雑なつながりについて検討する機会となりました。

加えて、プログラムとしては前後しますが、自由論題における近藤会員、梅川会員、そして韓国ケベック学会 (以下ACEQ) から来てくださったキム・インキョン先生からのご発表も、言語学・政治学・文学と多様な面から、ケベックにおける社会文化を照射した、極めて興味深いものでした。長年交流のあるACEQからは毎年1名の先生に参加していただいておりますが、今後さらに交流を活性化するために、将来的に何らかのテーマで共同企画なども実施できたらよいのではないかと夢想した次第です。

全体として、今回の大会は、創設後10年の間にAJEQ会員の研究・教育活動が質・量ともに大きく発展してきたことが分かる大会となりました (会員の研究をまとめた書誌がHP上にて閲覧可)。年々大学における研究・教育活動が厳しい状況になりつつある中、徐々にとはいえ会員数も増えてきており、今後のさらなる発展を目指して全国大会を含めた様々な企画の提案・運営において、会員の皆様からのご協力を引き続きお願いしたいと思います。

(日本ケベック学会副会長)

### <日本ケベック学会第6期役員紹介>

去る10月13日に開催された日本ケベック学会総会において、第6期役員が承認されました。

- 会長 立花 英裕 (早稲田大学)
- 副会長 丹羽 卓 (金城学院大学)
- 真田 桂子 (阪南大学)
- 廣松 勲 (法政大学)
- 顧問 小倉 和子 (立教大学)
- 監事 加藤 普 (理化電子)
- 曾田 修司 (跡見学園女子大学)
- 理事 荒木 隆人 (岐阜市立女子短大)
- 飯笹 佐代子 (青山学院大学)
- 大石 太郎 (関西学院大学)
- 片山 幹生 (早稲田大学)
- 河野 美奈子 (立教大学)
- 近藤 野里 (名古屋外国語大学)
- コルベイユ, スティーヴ (聖心女子大学)
- 杉原 賢彦 (立教大学)
- 関 未玲 (愛知大学)
- 橘木 芳徳 (暁星学園)
- 西川 葉澄 (慶應義塾大学)
- 矢頭 典枝 (神田外語大学)



## <各セッション報告>

2018年度全国大会は、開催校の愛知大学を代表して中尾浩・名古屋キャンパス教学部長、さらにケベック州在日事務所代表のリュシ・トランブレール氏からご挨拶をいただいたのち、自由論題セッション、基調講演、シンポジウムの順に行われ、活発な議論が繰り広げられました。以下は、それぞれの司会者からの報告です。

### 自由論題セッション

司会：矢頭 典枝（神田外語大学）

自由論題の第一報告は近藤野里会員による「ケベック州で出版されたフランス語教科書と話し言葉としてのケベック・フランス語の語彙的・統語的特徴」と題する言語学の分野の報告であった。近藤会員は、2015年から2018年にかけてケベック州で出版された移民向けのフランス語教科書 *Par ici Méthode de français* をコーパス（言語資料の総体）として用い、ケベック州、ひいてはカナダ、北アメリカ、というコンテキストにおける話し言葉としてのフランス語に焦点を置き、頻度が高い語彙と語法の習得が重視されていることを様々な事例を挙げて説明した。このコーパスで観察されたケベック・フランス語の語彙的な特徴としては、アングリシズム（英語的要素の転移）(bye、gym、muffin など)、形容詞 (plate、tanné など)、副詞 (présentement など)、名詞（「朝食」という意味の déjeuner など）、動詞 (jaser など)、その他 (la fin de semaine など) が挙



近藤野里会員

げられた。統語的特徴としては、基本的には規範から大きく外れる文構造はこの教科書には含まれないことがわかった。また、倒置疑問文は頻度が高く、ケベック・フランス語に特有の語法 *Il joue-tu de la guitare?* といった疑問文形マーカーなどの例も少数ながら提示されることが指摘された。最後に、教科書のなかで地域的な変異に基づく言語的規範としてのケベック・フランス語の標準とは何か、という議論が展開された。質疑応答では、基調講演者のブシャール氏より、報告で挙げられたいくつかの語に関し、ケベック州のフランス語母語話者にそれらについての意見を聞いた方がいいというアドバイスがあった。

第二報告は梅川佳子会員の「チャールズ・テイラーが1970年に出版した *The Pattern of Politics* におけるカナダ・ケベック論」であった。まずテイラーのヨーロッパにおける青年時代の活動と思想とカナダでの政治活動を概観し、その政治経験に基づいて1970



梅川佳子会員

年に出版した本書におけるテイラーの主張を次の4つの点にまとめた。1)カナダにおけるナショナルな統合の問題、すなわちカナダのアイデンティティとは何か、という問題に取り組んでいるが、それを探求する際に、カナダ独自の方法を生み出す必要がある。2)フレンチ・カナディアンとイングリッシュ・カナディアンに中立であろうとするテイラーは、両者がお互いを恐れていると指摘している。3)ケベックの分離主義について、フレンチ・カナディアンは、イングリッシュ・カナディアンの連邦崩壊の可能性に対する不安を理解すべきであり、他方で、後者は前者のネーションとしてのアイデンティティが分離主義の前段階であるわけではないことを理解する必要がある。4)両者の一体化は共通の未来に基礎づけられて生み出される。質疑応答では、新民主党 (NDP) 内部におけるテイラーの政治的立場はどのようなものだったか、NDP 内部での意見の対立が、テイラーが政治活動から

離れて哲学の道に入っていった原因なのではないか、という質問があった。また、青年期のテイラーが持つに至ったカナダの連邦制に関する抽象的な政治思想が後期のテイラーにみられるような具体的な制度構想に発展したのか、という質問があった。

フランス語による第三報告は韓国ケベック学会 (ACEQ) から派遣されたキム・インキョン (Kim In-Kyoung) 氏による「ソシオトープとしての道: ガブリエル・ロワの『アルタモンへの道』」と題する文学の分野の報告であった。キム氏は、まず「ソシオトープ」という語の定義を試み、それがロワの作品の基本的なコンセプトであると提起し、ロワの人生と作品を再考した。小説家であれば誰もが「道」を探すという視点に立ち、「マニトバ」と「ケベック」の中間状態にあるロワという作家がどのように認識されているか、という点を整理し、ロワ自身は絶えず自分のアイデンティティについて落ち着かない気持ちを持っていたと指摘した。そして「ソシオトープ (社会的場所)」が現



キム・インキョン氏

実的な場であると同時に想像的なものでもあり、様々な世代の人間たちが暮らす可塑性のある場所としてとらえ、ロワはつねに対立する二つのもののあいだで生きていて、その二つのものをつなぐ「道」こそが、彼女の実生活と作品の中の「ソシオトープ」そのものだったと論じた。『アルタモンへの道』のなかでは、放浪者と定住者、広大な平原と不動の丘、といった対立が語られている。質疑応答では、会場から「ソシオトープとしての道」というのは難しいので、もう一度まとめるとどういうことになるのか、という質問があった。

\*\*\*\*\*

#### 基調講演

司会・通訳：立花 英裕（早稲田大学）

ジェラルド・ブシャール名誉教授の講演「グローバル化の強い影響下にあるナショナルな神話の状況」は、本大会の目玉だった。今回のブシャール先生の招聘には幾つかの背景がある。一つには、丹羽卓会員の監訳によって、『間文化主義（インターカルチュラリズム）多文化共生の新しい可能性』（日本カナダ学会特別賞受賞 [翻訳書]）が2017年末に出たばかりで、学会員の関心が高まっていることがあった。もう一つは、AJEQ 設立10周年を迎えるにあたって、ケベックの知性を代表するブシャール先生ほどふさわしい講演者は他に考えられないという共通の認識である。

講演の内容は、大きく2部に分かれていた。第1部は、ナショナルな（あるいは社

会的な）神話の分析と理論構築に当てられていた。社会を動かす思想は「自由、平等、民主主義のための戦い」のような合理的理性による理念だけに依拠しているのではなく、「感情、超越性、聖性」が介入してはじめて現実的な力になる。神話とは、理性と感情の混合によって形成される、このような現実的な力であり、想像域の中で、「聖なる価値」を帯びることによって社会を根底から支えている。

次に、神話の構造的特徴が描かれる。神話は複数の要素によって成り立ち、「指導的神話」を底辺としたピラミッド型の構造を呈している。このピラミッド構造を支えているのが「固着点 *ancrage*」であり、過去の忘れがたい出来事や体験によって社会内に残っている精神的刻印である。この精神的刻印としての固着点から、たとえば、平等、正直、正義、自由、支配欲、復讐願望などを含み、各社会に固有のエートスが醸成され、帰属意識の条件としてのアイデンティティの形成が促されるというのである。

ごく概略的だが、以上のような社会的神



ジェラルド・ブシャール氏（左）と立花英裕会員

話の分析と考察を踏まえて、次に実際の神話の分類が試みられ、どのように神話が各ネイションにおいて生成するのか、具体的な事例を通して論じられる。第2部の「ナショナルな神話の現状と将来」では、現代のネイションを7つに分類し、それぞれに簡潔・明快な診断をくださった上で、ナショナルな神話の将来にまで議論が及んでいる。大変示唆に富んだ、面白い分析で、本講演の独自性は、神話論を一般論にとどめず、世界の諸ネイションを比較論的に分析してみせたことにある。

(1) 繁栄の神話。代表的な例として英語系カナダがある。英語系カナダは、多様性とグローバル化を積極的に受け入れ、自らをグローバル化したネイションである。中国もこのグループに入る。中国は長い恥辱の時代に別れを告げ、「中華の夢」を追求する時代に入っている。(2) 適応途上の神話。均質性を基盤にした従来タイプの神話を保持しながらも、時代の変化に対処する修正を試みているグループ。ケベック、フィンランド、アイルランド、カタルーニャなど。(3) 緊張下に置かれた想像域。従来神話が時代の変化に対応できなくなっているにもかかわらず、頑なに変化を拒んでいる事例。その典型として、共和主義神話に固執するフランスが挙げられている。(4) 凋落し、建て直しを待つ神話。スイス。「逃避の地」としての国民的使命感が失われつつあり、ナショナルなアイデンティティが不確かになり「分断したネイション」の様相を呈して

いる。アメリカン・ドリームが衰弱したアメリカ合衆国も、この範疇に入る。(5) 矛盾に直面した想像域。ケベックはこのカテゴリーにも入り、脆弱なマイノリティとしての自己防衛的な側面と、再征服の神話によって変革に踏み出す大胆さが併存している。他に、同質性の神話と移民の必要性の間に挟まれている日本が挙げられる。(6) 危機におかれたナショナルな想像域。自分が何であり、どんな使命をもっているのか分からなくなっているイギリス。(7) 失敗。「虹のネイション」を掲げ、白人と黒人を統合しようとして失敗した南アフリカ。

ブシャール先生は、国民国家やネイションに未来がないと考えているわけではない。ネイションは地球規模で継起する諸事態に対処するために保護空間を必要としており、連帯や民主主義などの意味の産出が可能な単位である。したがって、ナショナルな神話が必ずしもグローバル化の世界に対応できないわけではなく、その未来は、「グローバル化したネイション」に求められる。それは、ナショナルなもの、移民に代表されるようなグローバルなものとの間の相互作用によって形成されるネイションである。もっとも、筆者はブシャール先生が本当に国民国家の未来に全幅の信頼を置いているのか、疑問を抱かないわけではない。なぜなら、講演は疑問文で終わるからである。「ネイションはなおも夢を見ようとしているだろうか。なおも夢を見る能力があるだろうか」。問いへの答が肯定なのか、否定な

のか、講演は明確な答をあたえずに終わる。

予定の時間を大幅に超過したため、質疑応答はなされなかった。会場は熱心な聴衆の熱気で包まれ、ブシャール先生は興に乗ってどこまでも話したような様子だった。多くの聴衆がおそらく感じ取ったのは、長年のケベック研究が現代世界全体を捉えた理論構築に向かう必然性であり、先生の終わりなき、無限の思索である。たしかにもともと先生のケベック研究は、その核心において一地域に限定されない概念装置への配慮を内包していた。それがナショナルな神話の地球規模の考察へと展開したのである。講演の終わった後のブシャール先生の微笑みには、日頃、インターネットなどで見られる論争中の厳しい表情からは予想がつかない柔らかさがあった。それは、彼の学問的蓄積からにじみ出る微笑みであり、AJEQの会員たちに快い知的刺激を与えてくれる微笑みだった。

最後に、この報告が、丹羽卓会員の講演翻訳原稿に多くを負っていることを記しておきたい。

\*\*\*\*\*

### シンポジウム「現代社会の『神話』とネイション」

司会：小倉 和子（立教大学）

本シンポジウムは、G・ブシャール教授の基調講演「グローバル化の強い影響下にあるナショナルな神話の状況」を承け、現代社会における「神話」の機能について、いくつかの地域を取り上げながらさら

に検討するために企画された。共同体の形成に重要な役割を果たしていると考えられるさまざまな「神話」は、ケベック、カナダ、日本、あるいはアフリカ諸国のネイション構築においてどのような機能を果たしてきたのだろうか。それらは今後どうなっていくのだろうか。こうした問いが出発点にあった。

まず、杉原賢彦会員（立教大学）から「映画による神話投影—ケベックからアフリカへ」と題する報告があった。J-M・フロンドンの『映画と国民国家』を引きながら、20世紀には国民の歴史と映画の歴史のあいだに密接な相関関係があったことが指摘された。そして、『かんじき競走者たち』（M・ブロー／G・グルー、1958）に代表されるようなケベックのダイレクト・シネマが、民衆のありのままの姿を映し出すことによって彼らの自覚を促し、＜静かな革命＞を牽引したこと、そればかりか、J・ルーシュとの出会いにより、フランスのシネマ・ヴェリテを



杉原賢彦会員



伊達聖伸会員

經由して、独立直後のアフリカ諸国のネーション構築にまで寄与したことが、多くの貴重な映像とともに示された。

次の伊達聖伸会員（上智大学）は、「現代日本におけるネーション神話の諸側面」と題する報告で、日本社会が未だに「引き延ばされた戦後」を生きているとしたうえで、それを支えてきた3つの代表的な神話を検討した。すなわち、「単一民族神話」、「終戦にまつわる神話」、「原発安全神話」である。日本民族は先住民族や大陸からの帰化人と融合しながら同一民族として神話化され、終戦記念日は死者を思うお盆と融合して人々の記憶に留められ、被爆国日本はその悲惨さを体験しているからこそ原子力の平和利用に貢献できるのだという神話が打ち立てられる…。こうした過程で用いられてきた巧妙なレトリックが、小熊英二、佐藤卓己、吉見俊哉らの著作を引きつつ明るみに出された。

3番目の報告は、特別ゲストの大中一彌氏（法政大学）による「道理と合理のあい

だ：間文化主義に関する若干のコメント」であった。氏は、ブシャール教授の著作『間文化主義』、『ブシャール=テイラー報告書』、『神話の合理と非合理』を丁寧に読み解いた後、昨年10月にケベック州で成立した62号法に言及し、ニカブやブルカの着用を制限しようとする昨今のケベック州はフランスに似てきているのではないかと指摘した。そして、幕末に立憲思想の重要性を説きながらも、明治維新以降は国家の「近代化」と「生き残り」のために自由民権思想を犠牲にしていった加藤弘之を例に引きながら、近年のイスラム諸国に見られる女性の「控えめなファッション」は、「文明化」に伴う画一化の現れなのか、それとも「生き残り」をかけた「国民文化」の側の闘いなのか、はたまた女性がみずからの身体の実を行使した結果にすぎないのか、と問い、近年さまざまな場面で生じているリベラルな価値観とそれに逆行する動きとを明らかにした。



大中一彌氏



大石太郎会員

最後は大石太郎会員（関西学院大学）による「カナダのアイデンティティを表象する首都オタワのカナダ・デー」と題する報告だった。1982年、それまでのドミニオン・デーからカナダ・デーと改称されて現在に至る、実質的な建国記念日である7月1日を祝う首都オタワでのイベントがどのように変化・発展してきたかを主要紙の記事と現地観察に基づいて検討した。1990年、ミーチレイク協定の破綻以降、ショーではそれまで以上に国家の一体感が演出されるようになったことが指摘され、今後は先住民も含めた「建国の3民族」による新たな神話が作り出されていくのではないかと締め括られた。

「ネイション」と「神話」一検証すべき時代も地域も限りなく広がりうるテーマだったが、以上が4名の登壇者からの報告の概要である。このあとブシャール教授からもコメントをいただいた。中でも、伊達会員が論じた日本の「単一民族神話」（「神話」と

して捏造されたもの）には殊のほか関心を抱いたようだった。もしかしたら間文化主義の第一人者の頭の中には「多様性のケベック」対「単一性の日本」という図式が出来上がっていたのかもしれない。その後の懇親会や講演の場でもこの点を繰り返し出席者たちに尋ねていたのが印象的だった。また、大中氏の発表にたいしては、宗教的標章をめぐる問題に政府が介入して成功した例はない、これは世俗社会（企業などの現場）が組合や少数の知識人とともに決めていくしかないものだ、と実感のこもったコメントが寄せられた。

その後のフロアとの質疑応答は、残念ながら時間的制約のため十分し尽くせたとはいえ難い。懇親会の場で、よりざっくりばらんな議論ができることを期待して、シンポジウムは白熱した空気の中で閉じられた。

\*\*\*\*\*

### <特別寄稿>

## 国際地理オリンピックケベック大会報告

### 国際地理オリンピック日本代表チーム

#### 大会の概要

ケベックシティの Laval 大学を会場として行われる第15回国際地理オリンピックに参加するため、私たちはモントリオールで飛行機を乗り換え、ケベックシティに7月29日に到着しました。翌朝、チームで市内を巡検しました。セントローレンス川のエスチュアリーと兩岸の崖、その上にそびえる歴史的建造物が印象的でした。



ケベック市内にて

31日に開会式が行われ、各国の代表選手と話げできました。多くの選手が日本のことを知っており、中には学校で日本語を学習している人もいました。翌日からは4日に渡ってテストが行われました。初日は筆記試験、2、3日目は屋外で行うフィールドワークテスト、4日目はコンピューターを使って行うマルチメディアテストでした。3日目に行われたポスターセッションでは、静岡県三島市の湧水について調査した内容を各国代表に発表しました。

大会期間中は、他国の代表との交流を楽しむことができ、ドイツとベラルーシの代表選手と囲碁をしたことは一生の思い出と

なりました。また、4日目の夜にはカナダの文化について学ぶイベントが行われ、歌やダンスを楽しみました。5日目は遠足としてモン・モレシーの森に向かい、森林保護と調査についての取り組みを学びました。メダルを獲得できなかったのは残念ですが、ケベックで過ごした日々はとても有意義でした。

(長岡祐生：ラ・サール高等学校3年)

### ケベックシティ

私たちは空路でケベックシティに入りました。上空から見るとのっぺりとした様子である対岸のレヴィイに対して、高い崖の上に横たわるこの町は隔絶性に富んでおり、城塞都市としての佇まいを未だ残しているかのような印象を受けました。

さて、この町の市街地は丘の先にあり城壁に囲まれたアッパータウン、川沿いの平地に広がるロウワータウンから成る旧市街と、これに近接する新市街から構成されます。アッパータウンは天を衝くかのように



ケベック市内事前巡検中の様子



カナダの選手たちと

高くそびえるシャトー・フロントナックをはじめとして、ノートルダム大聖堂などヨーロッパ風の大型建造物が立ち並ぶ地区です。もちろん大通りには観光客が溢れているのですが、脇道をのぞいてみると静謐な路地に満ちる、石造りの建造物から醸し出される凛々しい雰囲気、歴史の薫りと風格を感じました。それに対し繁華街であるロウワータウンのプチ・シャンプランや新市街のサン・ジャン通りは総じて街の彩りが豊かで、活気に満ち滲刺としているように思われました。

歴史的にも空間的にも立体的な構造をしているケベックシティですが、レヴィイから見るとその奥行きが凝縮されて一つの姿を見せるところが面白いところであり、美しい景観を生み出していました。

(中尾俊介：洛星高等学校2年)

### フィールドワーク **Baie Saint-Paul**

会場の大学から行き先を告げられず、セントローレンス川を下流にバスで約90分、

我々のフィールドワークテストの舞台になったのは **Baie Saint-Paul** という田舎町でした。シャルルボワ地方の玄関口となるこの街は、3億6000万年前に形成されたシャルルボワクレーターの内側、ゴルフ川がセントローレンス川に注ぎ込む合流部に位置し、多様な地理的特性に恵まれています。また、風光明媚な土地柄に惹かれた多くの芸術家が居を構えてきた場所であり、街中では多くの画廊やモニュメント、旧邸を見つけることができます。さらにセントローレンス川沿いには、草原や森林、湿地といった多様な植生に加え砂浜も見られ、地域の人々の憩いの場となっています。そんな **Baie Saint-Paul** での、今回のフィールドワークのテーマは以下の2つでした。

- ①街中に残る文化・歴史的遺産を探し、地図を作成するとともに、観光の妨げになる事物を取り上げて、その問題の解決策を探る。
- ②セントローレンス川沿いの植生を調査し、持続可能性に配慮した相応しい土地利用を考える。

短時間ではありましたが、テーマに沿って、ケベック州の個性豊かな生活の一面を覗くことができましたと思います。

(武藤彰宏：東京都立日比谷高等学校3年)

### 遠足 **モン・モレシーの森**

大会5日目は選手全員でケベック北部にある Laval 大学の保有地であるモン・モレシーの森に行きました。カナダの大自然を



閉会式の後に

味わうことのできる機会では日本では見ることのできないアパラチア山系の大地形を感じることができました。大自然の中で、カナダの自然を研究している方々のお話を聞くことができました。午前中にカナダの大自然を満喫した後は氷河湖畔にある Laval 大学の研究所で晩御飯を食べました。その前後のフリータイムで氷河湖の周りの遊歩道を歩きました。倒木を避けながら透き通った氷河湖を横目に、珍しい色をしたきのこやムース（ヘラジカ）といったカナダ特有の生き物たちを見たあの経験は、この旅で最もカナダを実感できたひと時でした。最後は夜の氷河湖でのコンサートでした。自然との調和がコンサートのコンセプトであり、真夜中の自然に囲まれた静寂の中でのコンサートはアニメに出て来そうな幻想的な感覚がしました。音楽もデジュリドゥなど斬新な楽器で鳴き声などの自然界の音を表現していて、自分が自然界の中の1つのアクターであることを再認識することができました。

(佐藤光駿：早稲田高等学校3年)

(付記)

本報告掲載の経緯は以下のとおりである。国際地理学連合 (IGU) の大会に合わせて開催される国際地理オリンピックがケベックシティで開催され、日本から4名の高校生選手が参加した。選手の派遣前に国内で開催される強化研修会にケベック事情の講師として編集子(大石)が招かれ、その際に高校生のケベック見聞について本ニュースレターへの寄稿を依頼し、快諾を得た。選手諸君ならびに、とりまとめにご尽力くださった神奈川県平塚市立金目中学校の大谷誠一・統括教諭に感謝申し上げます。

●編集後記●

全国大会に先立つ10月1日、ケベック州では州議会議員選挙が行われ、ケベック未来連合(CAQ)が初めて政権を担当することになりました。ケベックの未来はいかに？

本年もお世話になりました。Joyeux Noël et Bonne année 2019! (T)

日本ケベック学会 (2018年11月現在)

●主要役員

- 立花英裕 (会長)
- 丹羽 卓 (副会長)
- 真田桂子 (副会長)
- 廣松 勲 (副会長)
- 小倉和子 (顧問)

●広報委員

- 大石太郎
- 片山幹生
- 杉原賢彦
- S・コルベイユ
- 小松祐子

\*\*\*\*\*

AJEQ ニュースレター

年3回発行

発行人：立花英裕 編集人：大石太郎